



科学的見地、動物行動学に基づいた鳥獣被害防止対策の推進

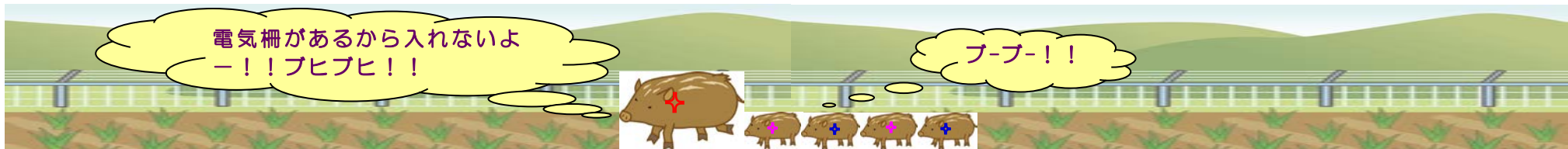
～「農村伝説」からの脱却！！（概要版）～

その1 ●電気柵を設置してもイノシシに侵入されてしまう。	→	No	電気柵は有効です。
その2 ●ジャンプするので電気柵は高い方がいい。	→	No	高さというよりは、20cm間隔がよい！
その3 ●夜行性なので、電気柵の電源は夜だけでいい。	→	No	夜行性ではありません。
その4 ●イノシシは高く飛ぶので、1mの柵では足りない。	→	No	怪我が致命傷なので、高く飛びません。
その5 ●イノシシは夜行性なので光りに弱い。	→	No	夜行性ではありません。
その6 ●オオカミの糞尿を置けばイノシシは追い払える。	→	No	馴れてしまうことがあります。
その7 ●イノシシの嫌いな植物を植えれば絶対大丈夫。	→	No	無視されることがあります。
その8 ●牛かヤギを放しておけば大丈夫。	→	No	牛やヤギがいるだけでは不十分です。

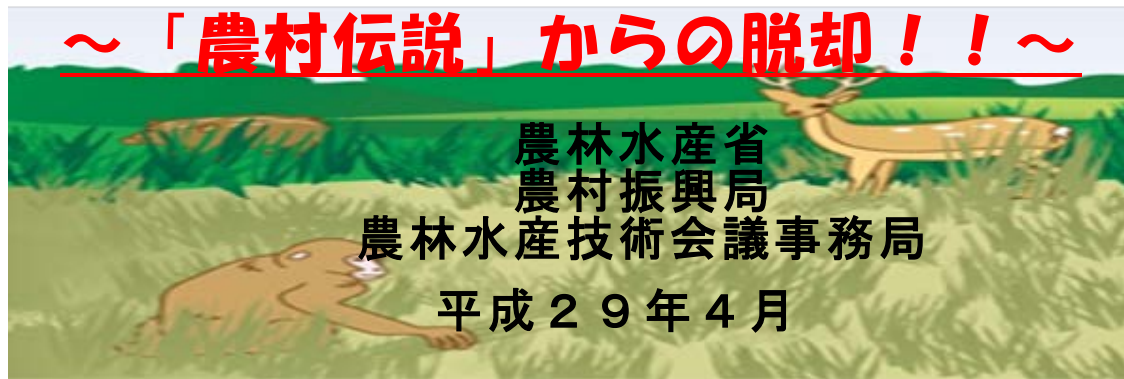
詳しくは次へ

農林水産省
農村振興局
農林水産技術会議事務局

平成29年4月



科学的見地、動物行動学に基づいた鳥獣被害防止対策の推進



農村伝説打破! その1。

【農村伝説】

- 電気柵は、侵入防止効果があるのか疑問。設置しても、必ず、侵入されてしまう。

【動物行動学からの鳥獣被害防止対策】

- 動物の行動特性を考慮して設置・管理すれば、必ず、効果がある。効果が見られない場合には、必ず、設置や管理のミスがある。



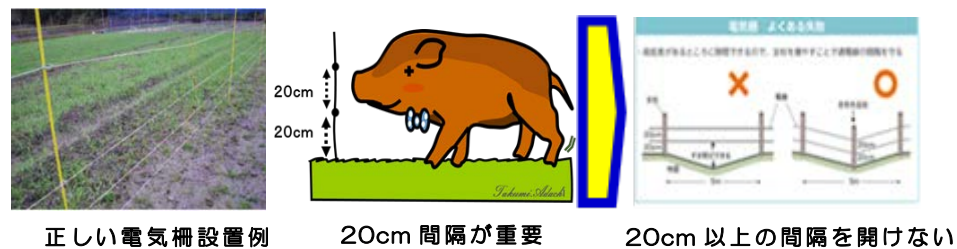
農村伝説打破! その2。

【農村伝説】

- 電気柵をジャンプして逃げるのを見たことがあるので、電気柵は、高い位置で張ったほうがよいのではないか?

【動物行動学からの鳥獣被害防止対策】

- 電気柵の20cmと40cmという間隔の高さは、イノシシにとって物理的に無視できない邪魔な高さである。低いのではないかと感じるが、イノシシの鼻の動きの高さと同じであり、鼻で通電するので、この高さが最も効果的である。



農村伝説打破！ その3。

【農村伝説】

- イノシシは夜行性なので、電源を入れるのは夜間だけで良いと思う。

【動物行動学からの鳥獣被害防止対策】

- イノシシは夜行性なわけではなく、人を避けるため日没後の出没が多いだけである。人がいなければ、明るい時間にも出没する。安全対策や漏電対策と共に24時間通電が必要である。



「電気さく」とは？

●田畑や牧場などで、高圧の電流による電気刺激によって、野生動物の侵入や家畜の脱出を防止する「さく」のことです。

●「電気さく」は、人に対する危険防止のために、電気事業法で設置方法が定められています。

「電気さく」を設置する際の主な注意点

家庭用電源から電源、電気さくに電気を供給することは厳禁に行わないでください。人や家畜を死傷させる事故につながるおそれがあります。

電源及び漏電遮断器

30分または1パッチリー

充電するタイプを含む

家庭のコンセント式コンセント 漏電遮断器

電気さく用電源装置

開閉器(スイッチ)

漏電遮断器の設置

電気さくを公道に近い人が容易に立ち入る場所に設置する場合は、30分または1パッチリー以上の電圧(家庭のコンセントなど)から電気を供給するために、漏電遮断器を設置する必要があります。

開閉器(スイッチ)の設置

電気さくに電気を供給する回路には、電気さくの電源装置と、電気さく電源が接続できるように、開閉器(スイッチ)を設置する必要があります。

※電源装置本体に付属されており、容易に操作できる場合、外鎖に追加する必要はありません。

危険である旨の表示

電気さくを設置する場合は、人が見やすいように、適切な位置や期間、見やすい文字で危険である旨の表示を行うことが必要です。

※電気柵安全対策パンフレット(平成27年8月版)農林水産省ホームページより抜粋

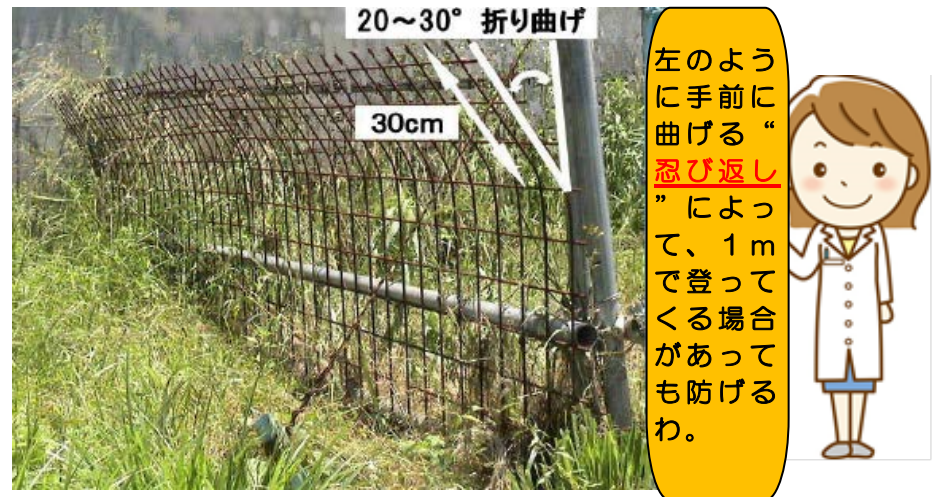
農村伝説打破！ その4。

【農村伝説】

- イノシシが、1.2mの高さを飛び越える映像を見たことがあるので、ワイヤーメッシュ柵の高さは1mでは低すぎるのではないかと？

【動物行動学からの鳥獣被害防止対策】

- イノシシは、通常は、潜る行動をとり、飛ばない。野生生物にとって、飛んで脚を怪我してしまうことは命にかかわることである。人から逃げる時には、飛んで逃げることが多いが、田畑への侵入時には、飛ぶよりは潜る行動をとることが基本。ワイヤーメッシュ柵の高さはおよそ1mで効果を発揮する。



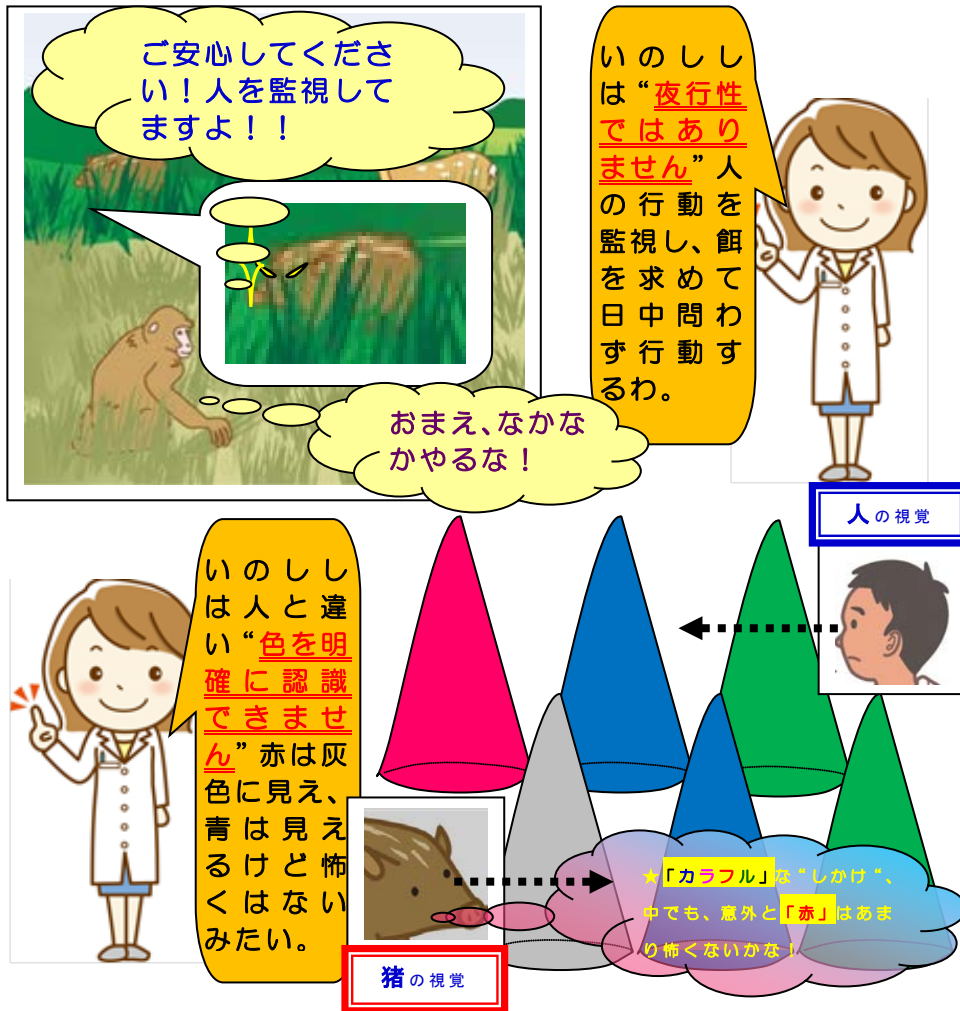
農村伝説打破！ その5。

〔農村伝説〕

- イノシシは、夜行性動物なので、光に弱い。

〔動物行動学からの鳥獣被害防止対策〕

- イノシシは、夜行性ではない。光の効果がある場合とは、何もなかったところに、急にライトが向けられたという環境の変化に警戒しただけである。一定期間が経過すれば、慣れてしまう可能性が高いため、根源的な防除対策には向かない可能性がある。



農村伝説打破！ その6。

〔農村伝説〕

- オオカミは、イノシシの天敵だったので、糞尿を置いておくと、本能的に忌避して防除できる。

〔動物行動学からの鳥獣被害防止対策〕

- 飼育したイノシシを用いた実験（農研機構が実施）によれば、オオカミの尿の臭いそのものに対する忌避行動は見られなかった。一方、野外で効果があるように見える場合には、何もなかったところに、急に臭いのある物が置かれたという環境の変化に警戒しているためだと考えられる。一定期間が経過すれば、慣れてしまう可能性がある。



農村伝説打破！ その7。

【農村伝説】

- 忌避植物を畑の周りで栽培すれば、内側の作物を防除できる。イノシシが、忌避して食べない作物がある。

【動物行動学からの鳥獣被害防止対策】

- イノシシにあっては、無視をしているだけで、怖がったり、嫌がったりしているわけではない。イノシシにとっては忌避植物というよりは、食べ物として認めていない、いわゆる無視植物という可能性がある。例えば、人がレタスやほうれんそうは食べるが、雑草を食べないのと同様であり、被害低減対策として過信は禁物である。



シソ（生育盛期）



シソ（定植直後）

農村伝説打破！ その8。

【農村伝説】

- 牛やヤギなどの家畜は、野生生物を追い払ってくれる。耕作放棄地に牧草を植えて、一年中、牛を放したい。
- 野生動物用に山に畑を作れば、里に下りてこない。

【動物行動学からの鳥獣被害防止対策】

- 家畜は野生生物を追い払わない。しかし、家畜がいると、野生生物は出てきにくい。これは、家畜が耕作放棄地の茂みを食べることによって、見晴らしが良くなり、野生生物の警戒心を増幅させることができるからである。家畜がいることで、環境管理の効果が期待できる。
- 山の畑ではすぐに、食料が足りなくなり、里に下りてくる。美味しい作物の存在を知らなかった野生動物にも作物の味を覚えさせることにより、被害は拡大する。



図 放牧による耕作放棄地の管理
放牧により、イノシシの隠れ家となる雑草、イノシシの餌となるくずなどが除去される。

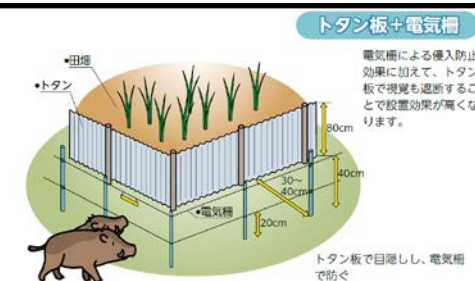


図 進入防止効果の上がる対策の例
（複合策による防除）



“放牧の効果”も一定程度効果を発揮しとるの～！！

防護柵もしとるけん、“総合効果”を發揮しとるんよ！！

“動物の行動特性”を理解して、これからも対策をがんばるぞ！！

※詳細やその他鳥獣被害対策等については、農林水産省ホームページ内の①「野生鳥獣被害防止マニュアル」、②「鳥獣被害対策コーナー」などをご参照ください。

① http://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/h_manual/h26_03/index.html ② <http://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/>